
さよなら井上くん

1月25日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら井上くん

【Nコード】

N4390Q

【作者名】

1月25日

【あらすじ】

※もう少ししたら更新再開します。たぶん。

突然現れた異形の化物と可憐な少女。

選ばれた最強の勇者であった彼は

化物を倒し

ついでに世界も救い

紆余曲折の末に少女と結ばれるのでした。

——なんてね。

そんな美味しい話なら
皆幸せになれるのに。

さよなら井上くん（前書き）

閲覧ありがとうございます。
プロローグ的なお話です。

さよなら井上くん

ゲームは好きだ。今までも色んなゲームをやってきた。

現実とは違う世界、違う法則で広がる物語。いつだってワクワクしながら先に進んだものだった。

最近ではどんどんゲームも進化している。グラフィックは実写かと思えるものもあるし、効果音だって臨場感がハンパない。

だから、目の前で高橋くんと武田くんが潰された時に思ったのは、人が潰れる音ってのはさすがに再現出来なかったんだなってことだった。

感覚的にはよくある『グチャ』でも『グシャ』でもなく破裂音。続いて固いものが砕ける音。最後に液体が飛び散る音だ。

ショックはなかった。

別に高橋くんが貸した2000円を返さないからとか、密かに想いを寄せていた菊池さんを武田くんにとられたからとか、そういうことじゃない。

あまりに突然で、何が起こったのか分からなかったからだ。

俺の気持ちを知らずに菊池さんとのデートを話す武田くん。俺の気持ちを知っていてチラチラとこちらを見ながら苦笑いを浮かべる高橋くん。

数瞬前までは確かにこの2人が俺の前を歩いていた。

それなのに、菊池さんが選んだ桃色のワンピースが如何に可愛かったか力説する武田くんの声が聞こえない。

それなのに、なんとか話をそらそうと昨日の晩御飯が思い出せない話をする高橋くんの声が聞こえない。

聞こえるのは、鈍く輝く黒色の腕から垂れた二人の血肉が、アスファルトにぶつかる音だけだ。

地面に広がった2人を挟むようにして俺の向かいに立つソイツは、どうみても人ではなかった。いや、地球上の生物で知らないのではないか。

西洋の甲冑を着たような金属質の体躯はゆうに2mを超している。細身の人型ではあるが、剥き出しの歯は鋭く尖っている。感情を感じさせない灰色の双瞳が俺をじっと見つめている。

俺は言葉もなくその視線を返すしかなかった。

そのままどれくらい時間が経ったのか。酸っぱいようなエグいような臓物の匂いが辺りに広がる中、夕焼けを背に人外の化物が口を開いた。

粘っこい音を立てながら唾液が糸を引く。

「みみみツケけたタタタ」

耳障りな音が飛び込んできて、図らずも体が跳ねた。

止まっていた空間を揺らす化物の声。

それまで心の奥で蠢くだけだった感情が溢れて心を覆い尽くす。尚も勢いの収まらないそれは、容赦なく吹き零れた。

コワイ。

膝が震え、全身から嫌な汗が吹き出だした。自分の喉が何かを叫び続けるが、直ぐに胃から込み上げてきたもので塞がった。

膝についてアスファルトに撒き散らす。胃液すらも出なくなり、それでもまだえづく。喉の奥で血の味がした。

涙で視界が滲み、荒い息を吐くたびに喉が痛んだ。

再び襲ってくる恐怖に噛み合わない歯がカチカチと音をたてる。
指先に伝わるぬるりとした感触は高橋くん、武田くんどちらのものかもわからなかった。

視界の隅で、千切れ飛んだのだろう高橋くんの腕時計を着けた腕が嫌な音を立てながら踏み潰される。
化物が一步こちらに踏み出したのだ。

「あ……ああ」

思うように動かない手足をばたつかせ、這いずるように後退する。
そんな俺を嘲笑うかのように、化物はゆっくりと近付いてくる。

ゲームは好きだ。今までも色んなゲームをやってきた。
現実とは違う世界、違う法則で広がる物語。いつだってワクワクしながら先に進んだものだった。

窮地に陥った主人公が不思議な力に目覚めたり、可憐な美少女が助けに来てくれたり。そんな展開は王道だけど、燃える。

状況条件はバッチリなだけだな。

この後に及んで、はつきり冴えてきた頭が導きだした今の状況は、まさしく絶対絶命。

到底コイツからは逃げられないし、勝てるわけもないことは蹴飛ばした足から伝わる痛みが教えてくれている。

今まさに降り下ろさんという無機質な左腕が、数秒後には俺の頭を砕くだろう。

武田くんや高橋くんと同じ音を立てて、同じ末路を追うことになる。

ふと浮かぶのは、菊池さんの顔。昔から大好きな幼馴染みで隣さんで、武田くんの彼女。ああ、もう元彼女か。

ホントに可愛いなあ、もう。こんな事ならもっと早くに告白すれば良かったよ。

きつと俺は大好きな武田くんと共に死んだ幼馴染みとしてしか記憶に残らないだろうな。

高橋くんなんでもっと哀れだ。大好きな武田くんと共に死んだ幼馴染みと、2人の話題によく上がっていた友達なんていう立ち位置になるのだから。

「ははっ」

降り下ろされる死の塊を見つめながら、馬鹿な想像に思わず笑みが零れた。

それにしても、死ぬ間際って世界が本当にスローモーションに――。

結局、友人2人よりも小さな音を立てて井上は息絶えた。

もし彼が世界に選ばれた勇者なら。特別な血を受け継ぐ救世主だったなら。

だが、所詮彼は完全無欠な一般人で、普通に青春を謳歌するはずだったちよっぴり不幸な少年C。

つまりその他大勢だったのだ。

さよなら井上くん（後書き）

「い、井上くーん！」

次の更新は2月上旬予定です。

はじめてのりんしたいけん(前書き)

序章的な。

いえ、プロローグとは違うのです。

よくわからないけど。

はじめてのりんしたいけん

——もしも。

もしも彼が持つ光がとても強く、大きなものならば。

もしも彼女が持つ光がとても弱く、小さなものならば。

そこに問題はあるのだろうか。

気にするべきは、その光があなたを照らしてくれているかどうか、だ。

誰かがそんなことを言っていた。

もしかしたら、本で読んだのかもしれない。漫画やゲームの受け売りではないことも否定は出来ない。

そんな程度の、あやふやな認識。大して重要な言葉でもない。

——でも。

今にも消えてしまいそうなあの弱々しい光は、俺を照らしていたのだろうか。

轟音。衝撃。また轟音。

ぶつかるコンクリートの破片による痛みが、否応なしにこれが現実であることを告げている。

「厄日にも限度ってもんがあるだろ……」

そう、厄日。

今朝少年が見たニュースでやっていた。射手座、12位。屈託のない可愛らしい笑顔で他人の不幸を告げる若手キャスター

曰く、『今日は思いがけないトラブルに遭うでしょう』。

占いなんて信じない少年は、ラッキーアイテムである赤チェックの服など着ていない。

当然だ。小林宗吾。彼は一介の高校生であり、学校指定の紺のブレザーを着ることが義務付けられているのだから。

それで、このザマである。

頬を掠めるコンクリートを砕く威力を持った剛腕。目があった瞬間身体が強張る濁った灰色の眼孔。心の根本から恐怖を沸き上がらせる叫び声。

宗吾がこの化け物と遭遇してから既に10分以上経っていた。

人を容易く叩き潰せるモンスター。本来ならとくに彼の命も刈り取られていてもおかしくない。

それを妨げているのは、少年の襟首を掴んで走る少女の存在。

まるで絵に描いたような忍者のように、屋根から屋根へと跳び跳ねていく。その度に宗吾の首は締め付けられているが、命には代えられないため黙っている。殆ど気を失いかけているせいもあるが。

「リフフタタたああアアア」

意味を成しているのか成していないのか。少なくとも彼には理解出来ない言葉の羅列を化け物は繰り返し吠える。

唾液を撒き散らし、曇った瞳は少年を捉えて離さない。

産み出される恐怖は四肢も、視線さえも動かすことを許さない。

風音が聴覚を支配する中に、弦楽器の音色にも似た軋みが響く。無機質な鋼の身体。光沢を持ち、しなやかに伸びる身体。

破壊を纏い振り上げられた腕の矛先は、宗吾を庇う少女に向けられる。

再び、轟音。

一軒家の二階部分は打ち砕かれ、衝撃が周囲に粉塵を撒き散らす。

「レベル持ち、か。……世界破りも始まってる」

服に着いた埃を払い、僅かに頬を伝う汗を拭った少女が小さく呟く。

既のところで一撃を回避した少女は、そのまま粉塵に紛れて距離を取っていた。

「大丈夫？」

「……お陰様で、首以外は大丈夫です」

少女の視線の先で少年は咳き込む。

返答の通り、首に若干とは言えない痛みに似た違和感があった。息をする際に掠れた音も鳴っている。

「あの化け物は撒いたのか？ ていうか、そろそろ説明してくれよ。今なら何言われても信じられる自信がある」

「説明はここを無事離れられたらする。ドールはあなたの位置が大体わかるから」

「おっけ、また楽しい楽しい空中遊泳の始ま……ん？」

再出発の言葉に「首持つかな」と首を回し始めた宗吾の動きがふと止まる。

少女の言う『ドール』と、あの化け物をイコールで結ぶ。ならば、と浮かんだ疑問は中々言葉にならない。

「ん、あれ？ あいつ、俺の位置がわかるの？」

「ええ」

「あはっ、ごめん。やっぱ信じたくない」

なんという罰ゲーム。

鬼が自分の場所を常に把握できるかくれんぼなんて聞いた事が無い、と少年は天を仰ぐ。神様に不平を呟こうとしたのだけれど。

見えた。空から降ってくる化け物。少女はまだ気付いていない。少年は反応が追いつかない。

それは危機。

——ズン、と重く間拔けな音。

ドールと呼ばれた巨漢は二人の脇に降り立った。不意を付かれた少女は動き出しが遅れて。

「しまっ——！」

瞬間。金属の拳が少女を打ち付ける。

はじめてのりんしたいけん（後書き）

ちなみに、少女は

「美少女と言えるほどではないけれど、少なくともクラスメイトよりは可愛い。背が小さいというのもポイントが高い。でもアイドルほどではなく、そこら辺に居そうな顔」レベルです。（小林宗吾談）

次の更新は3月までに、を予定しています。

p.s. 最後の一文はどうやったらページ内に収まるのか……（携帯）

はじめてのりんしたいけん に

豪快な音を立てて、少女の体が石垣を突き破る。そのまま家屋を突き抜け、少年の視界から消えた。

「ちょ……」

今まで間近で目の当たりにしてきた破壊力。今さら驚くに値しないはずではあるが、それでも、人体に発揮されたそれは少年から現状への理解を奪うには十分だった。

しかし、鋼の異形は逃げる事も忘れ啞然とする少年に目を向けていない。少女の消えた家屋の向こうを無言のまま見つめている。

少年はいつでも捕まえられる。命を奪える。あの少女がいなければ。故に少女を確実に仕留める事を優先したのだ。

異形・ドール。

強い破壊衝動を持った“彼”は、しかし知能はそれほど高くない。あらゆる行動はその本能に基づく。この時点では、まだ。

野生の動物に近い本能を持つがために感じた違和感。加えて赤子のように拙い判断力が、少年の命を繋ぎ止めた。

もちろん宗吾はそんなことには気づかない。風通しの良くなった家屋が音を立てて崩れてもなお、現状を理解していない。

目の前の巨体がその気になれば自分など即座に殺されてしまうことすらも、今や頭から抜けている。

ただ呆気にとられ、言葉すら失っていた。それもまた、ドールの意識から彼を反らすことに一役買っていた。

だから。だからこそ、時間は稼げたわけで。結果としては偶然に他ならないけれど。問題を先送りにするだけとはいえ、現状を打破するには十分だった。

瓦礫を飛び越えて飛来する黒い影。数はゆうに十を超える。そのうち一つは宗吾に、それ以外はドールに。

「ごガ!？」

影の正体は、刃渡りが1mを超えるような鉄剣。幅広で肉厚な刃を携えただけの無骨なそれがドールを強襲する。

しかし、宗吾がその様子を見ることはない。駆け寄った少女によって、既にその場から離れている。

金属のぶつかり合うような音だけが、小さく聞こえただけだった。

「なんていうか、何が何だか分からねえ。マジで」

少年の呟きは風に紛れて消えていく。

生まれた時から慣れ親しんだ町を、屋根より高い位置からという新鮮な目線で眺めるが、特に新しい発見はない。感動もない。

「何も分からなくてなんとかなる。世の中上手くできてるもの」

「ねえそれ本気で言ってる？ 心からそう思ってるの発言？ その考えだといつか命がなくなっちゃう気がするよ？ 例えば今とか」

「大丈夫。幸先は明るいわ」

「はははっ。語尾にダブリューつけちゃおうかな、三個くらい」

そう言って力なく笑いながら、少年は自分達を追いかけてくる鋼の化け物を見る。

ああ、またこの状況か。と、内心ため息をつきながら。

いや、全く同じというわけではない。先ほどなら少年の眩きが少女に届くことはなかった。少年の足が屋根にぶつかることもなかった。

少女に打ち込まれた一撃は、どんな楽観主義者でも無視できるものではない。頭からは血を流し、息も上がっている。速度も出ていない。

追いつかれるのが時間の問題であることは、明白だった。

「……あとどれくらいだ？」

眉根を寄せ少年が聞く。もちろん、目的地までの時間について。その言葉に少女は一瞬間をおいた。それまでの声音と違う、落ちていた様子に疑問を感じたからだ。

けれど答えが出るはずもない。宗吾が少女を知らないように、少女もまた宗吾の人となりを知らないのだ。

「あと10分もあれば着くと思う」

「間違いなく追い付かれるな。10分てことは八重見あたりか」

束の間の逡巡。

10年以上も住んでいる町だ。地理は把握している。それ故に浮かんだ案。上手くいけば時間が稼げるかもしれない。

けれど、確証はない。それに何より育った町だからこそ、躊躇いがあった。

「本当に、この世界はもう駄目なんだよな」

「ええ。今の私たちにはどうすることもできない」

「……そっか。わかった。なら、少し寄り道しよう。たぶん時間を稼げる」

少年の言葉に少女は首を傾げ、僅かに振り替える。

“時間稼ぎ”

こちらよりも速く、こちらよりも強く、こちらよりも堅く、こちらの位置が分かる。そんな相手に時間を稼ぐ方法がある、と少年は言う。

それがどんな方法かは少女には分からなかったが、このままでは追いつかれるのは間違いない。他に方法もない。それならば、と少女は承諾する。

「どこに行けばいい」

「しばらくはこのまま。まあ楽しみにしててよ。いい加減屋根の上走るのも、電線避けんのも飽きてきただろ？」

そう言って宗吾は追いかけてくる怪物に目を向ける。ヘラヘラと笑う少年の心に沸き上がる感情は怒り。彼には特別正義感がある訳ではない。あのドールが世界を壊しているのだ、と少女は言ったけれど、その事に動揺はあれど怒りはない。

もちろん、実感がないこともある。

見た目的にはそれほど世界に変化はない。何が起きているのかもよく分からない。

ドールがどういう存在なのか。少女がなぜ助けてくれるのか。全てが停止した世界で、どうして自分は動けるのか。

今の彼には何も分からない。

けれど。

自分の日常をぶち壊しにした糞野郎はあの怪物である、ということとは分かる。

自分を殺そうとし、少女を傷つけた糞野郎はあの怪物である、ということとは分かる。

だったら、やり返さないと気がすまない。

そう、彼は決して正義感に溢れた人間ではない。悪を許さない正義の味方でもない。そもそもこの状況に善悪の概念を挟んでいない。

やられたからやり返す。

ただそれだけだった。

はじめてのりんしたいけん に（後書き）

久しぶり過ぎて、どんな話しか忘れちゃった。
いや、読み返せばいいんですけど。

追記..

相変わらずパソコンはおじやんですが、いろいろとあれこれやった
らあれして更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4390q/>

さよなら井上くん

2011年11月15日00時07分発行